

ウィズコロナ・アフターコロナ社会の道しるべ^⑥

今後定着していくアフターコロナ社会についてのお考えは。

「ウィズコロナの生活を送っていく中で、リモートワークが増えましたが、このこと自体はよかったですと考えています。リモートワークに取り組むことは、以前から課題として挙げられましたが、なかなか浸透しなかったですから。このよき本質的な課題については、これを機に思い切り取り組むことがよいと思います。ただ、この際ということでも1〜2年であまりやりすぎない方がいいとも感じています。本質的な課題をこのタイミングで解決していくべきだと思います」

「リモートワークというのは閉鎖的なデジタル空間です。本来、人間の感性からすると、外の空間とつながっていることが当たり前でなければなりません。今後リモートワークやウェブ会議の利用がさらに進むと、人間同士の直接の対面は、せいたくなくなることになるかもしれませんね」

「そうした日常の変化を経ながらも、個人はより自由な方向、より多様性のある方向に志向されていくと感じています。アフターコロナではこれが加速するのではないかと思います。『みち』や『まち』はそのための基盤でもあるので、今後、志向を先取りしたさまざまなリニューアル、リデザインが必要になってくると思います」

「いま政府では自動運転システムの実用化について検討が進んでいます。こうした「移動のための技術革新」やインフラ整備についてはどう感じますか。」

「少子高齢化を迎えたわが国において、諸外国と比べると自動運転を適用するのに優位性があると考えていますが、すべてが自動運転になることはあるのでしょうか。一昔前の中国では、自動車がかさの象徴と言われ、自転車が掃かれました。しかし最近では、スポーツ自転車が売れていると聞きます。わが国において、今後、自動運転と手動運転がうまく両立すればいいなと思います」

「人間は、これまでの長い進化の歴史を経て、二足歩行に適した体の構造を持っているわけです。四足歩行では、速く走ることができませんが、二足歩行は、振り子のようにして歩くので、長い時間のエネルギー効率が高歩行に比べ優れています。歩くことは人にとっての基本であり、これからも変わることはありません。自動運転も重要ですが、スタートとゴールでは歩くこと自体にもっと目を向けてもらいたいと思います」



かすみがうら市民交流センター。サイクリングプログラムの拠点として公共施設が活用される事例もある

聞き手
中川 拓朗氏

日本みち研究所研究員、千葉県出身。
趣味：日本酒飲み比べ、好物：スイーツ全般。



為末 大氏

1978年広島県生まれ。主な著作に『Winning Alone』『走る哲学』『諦める力』など。趣味：料理、好物：餃子。



最後に建設業界の方にメッセージをお願いします。

「少し話がそれますが、オリンピック選手には3月生まれが少ないのです。これは同じ学年でも4月生まれの方は体がつきが一次的に大きく、運動もできるという『思い込み』『レッテル』が本人や周囲に生じ、実際はそのようなことはなくても、本人の『縛り』になってしまつております。私は人間の能力の可能性を開くことに興味を持っており、著書やSNS（インターネット交流サイト）を通じて発信していますが、このような『縛り』をリセットし、チャレンジすべきことが重要だと思います。このことはインフラ整備についてもいえると思います」

「建設業の世界でいえば、アメリカでは体育館などを建設する時、あまり完璧に作りこまないようにしています。例えば、床がコンクリートのままになっており、用途に応じてバスケットボールやコンサート、冬にはアイススケート場にも活用できるような工夫が施されています。ショッピングモールがスポーツ会場として使われることもあり、施設が高い汎用性を持っています。一方われわれ日本人は『みち』や『まち』に、限られた性能のみについて高い水準を要求してしまつてところがあります。しばり（ルール）も大事ですが、これからは、いろいろな環境に応じることが可能になるよう、性能に余白、余剰を併せ持ち、柔らかさや懐の深さを引き出すことが必要になるのではないのでしょうか。」

自由、多様性を加速させる

「みち」や「まち」



～ 道路・交通イノベーションをめざして～

一般財団法人 日本みち研究所

理事長 石田東生筑波大学名誉教授

(<http://www.rirs.or.jp/>) 「みち研」で検索